

英語教育におけるポストモダン絵本の活用

— Shaun Tan作*The Red Tree*をめぐる日本人英語学習者の多様な解釈に焦点をあてて —

小 野 章

広島大学大学院教育学研究科

清 水 奈 美

広島大学大学院教育学研究科院生

1. 研究の背景と目的

平成 25 年度から実施されている高等学校学習指導要領において、「コミュニケーション英語Ⅰ」は英語を履修する場合は唯一の必修科目である。この「コミュニケーション英語Ⅰ」に含まれる 4 種類の言語活動のひとつは「イ 説明や物語などを読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりすること」（文部科学省 2010, p.14）である。物語に関しては、指導要領解説に「単なる文章理解にとどまらず、（中略）物語を読む楽しさについても体験的に理解させることが重要である」（文部科学省 2010, p.14）と明記されている。(1) 物語の字義理解に加え、(2) 読む楽しさも重視されていることがわかる。

上の背景を踏まえ、(2) の「読む楽しさ」が「コミュニケーション英語Ⅰ」で担保されているのかを教科書分析を通して明らかにすることを本論の第一の目的とする（本論第 3 節）。本論の第二の目的はポストモダン絵本と関係している。同絵本は様々な解釈に開かれていると一般に言われる。この一般論が日本人英語学習にも当てはまるのか、さらには解釈が読みの楽しさに結びつくのかも検証したい（本論第 4, 5, 6 節）。

2. 基本概念の整理：解釈とは

読む楽しさを学習者に体験させるには、テキストを解釈させることが肝要だと考えられる。Barthes (1975) は、解釈こそが楽しさの源泉であると指摘した。小野・平川・柿元 (2016) は、教師によるテキスト解釈が学習者の読解に対する楽しさを助長することを量的・質的に実証している。また、村田 (2001) も、読み手は解釈の余地を多く含む物語を理解することに最初は困難に感じるが、隠された意味を明らかにしていくことに面白さや楽しさを次第に感じるようになる」と述べている。読む楽しさは解釈によって助長され得るとして、解釈とは何かを規定しておく必要がある。

解釈は読者によって展開される。とは言え、「何でもあり」というわけでももちろんない。例えば、ハンプティ・ダンプティは「“glory” とは “a nice knock-down argument” のことだ」（Carroll, 1998, p.186）と言ったが、それは解釈ではなく、単なる出鱈目である。エーコ (2002, p.37) も、解釈が成り立つのは作品が「それ自体であり続けることが出来る限りにおいてなのである」と述べている。「作品がそれ自体であり続ける」とは何か。その逆の例、つまり作品がそれ自体で「あり続けられない」例としてエーコ (1993, pp. 101-102) は、ワーズワースの詩「水仙」中の語 “gay” をめぐる「解釈」を挙げている。この語を「陽気な」という意味ではなく、「ホモセクシャルの」という意味に取ることは不可能だとエーコは指摘する。なぜなら、ワーズワースが書いた時代にはそのような意味はまだ存在していなかったからである。日本の英語教育を研究対象とする本論

にとって、エーコの「作品がそれ自体であり続けることが出来る限りは」という但し書きは有益である。というのも、この但し書きによって外国語として英語を学習する場合にありがちな「誤読」が排除されるからである。エーコ（1993；2002）に基づき、本論では解釈を、「書かれたものを、その言語等の妥当な意味理解に基づいて、読者がそれなりの説得性をもって自由に展開する読み」と定義する¹⁾。

3. 「コミュニケーション英語 I」の教科書分析

第1節で触れたように、指導要領は「物語を読む楽しさ」の重要性を説いている。検定教科書ではそれが本当に担保されているであろうか。このことを調べるために、物語に対する発問を分析することにした。発問を分析することで、教科書がどのような読みを学習者に求めているかがある程度はわかると判断したからである。採択率上位10位までの高等学校英語教科書「コミュニケーション I」に掲載されている全ての物語（Lesson 等の正課内の物語及び Further Reading 等の正課外の物語）に対する発問を分析対象とした。分析対象となったのはほぼ全ての発問であるが、具体的には、(1)教科書本文の後に続く“Comprehension”“Read It Through”“Reproduction”等における発問、(2)教科書本文と同ページの上部や下部等に掲載されている発問、(3)教科書本文の前に掲載されている発問である。ただし、音読に関わる発問（例：「物語を締めくくる最後の文を音読してみよう」）や、リスニングに関わる発問（問題文が記載されておらず発問内容が不明）は除外した。発問の数え方は、大問ごとではなく、小問ごとに1問とした。例えば、大問としての正誤問題に小問が8つある場合、発問の数は8とした。物語に対する発問の総数を調べた上で、字義理解に関わる発問の数、解釈に関わる発問の数を確認した。字義理解と解釈に関わる発問に着目したのは、これらが指導要領中で重視されている文章理解と読む楽しさの体験とに密接に関わると考えたからである。なお、前節での解釈の定義に基づき、解釈に関わる発問を「教科書の言語等に基づいて学習者が自由に展開する読みに関わる発問」と定める。

表1 採択率上位10位の「コミュニケーション I」（教科書 A～J）で使用された物語に対する字義理解、解釈、その他の発問数

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計
字義理解に関わる発問	12	18	2	13	35	18	5	8	8	54	173
解釈に関わる発問	0	4	0	0	0	4	0	3	0	3	14
その他	0	0	0	0	0	2	1	0	3	5	11
計	12	22	2	13	35	24	6	11	11	62	198

表1 最右列の「計」に着目すると、字義理解に関わる発問が173問あるのに対し、解釈に関わる発問は14問に留まっていることがわかる。物語に対する発問の総数（198）に占める割合は、それぞれ87.4%、7.1%ということになる（小数第2位四捨五入）。また、10種類の教科書中6種類では解釈に関わる発問は全く見当たらない。字義理解に関わる発問は確かに重要ではあるが、一つの問いに対して一つの正しい答えを想定したものである。換言すると、字義理解に関わる発問が学習者の解釈を促すとは考えにくい。以上のように解釈に関わる発問が十分ではないことから、教科書中の物語文は「読む楽しさ[を]体験的に理解させる」には至っていないと判断する。

4. ポストモダン絵本の特徴の記述と研究課題の設定

教科書中の発問では読者の解釈が促されないという現状を是正するためには、教師自らが新たに発問を作成するという解決策もあろう。ただ、そのための時間確保の問題や、発問作成の力量が教師に必ずしも備わっていない等の問題も想定される。そこで本論では、ポストモダン絵本を中等英語教育の副教材に使用することを提案する。というのも、4.2. で触れるように、ポストモダン絵本は発問が無くとも自ずと読者に解釈を促す可能性を有しているからである。

4.1. 絵本の読みに求められること

ポストモダン絵本に触れる前に、絵本の読みに求められるものは何なのかを簡単に確認しておく。文字通り、絵本は絵と言葉とによって構成されている。このことを香曾我部・鈴木（2012：20）は、「絵本は絵と詞（ことば）が互いに補完し合うことによって初めて成立するという特殊な性格を持った表現である」と記述している。そのため絵本の読みでは、絵と言葉をそれぞれ別にはなく、一緒に認識することが求められる（香曾我部・鈴木，2012；アーノルド，2002）。

4.2. ポストモダン絵本の特徴

Barthes（1975）の考えを援用した Nikolajeva（2010）は、絵本を readerly と writerly の2つに大別している。readerly な絵本とは「読み手として楽しめる絵本」である。つまり読者は、想定される作者／作品の意図を、絵本から受け取りつつ読みを楽しむ。作者／作品の意図と、読者の読みが限りなく一致するような読みであり、読者が新たな意味の生産者となることはない。一方、後者の writerly な絵本は「読み手としても書き手としても楽しめる絵本」である。writerly な絵本の例には、まさにポストモダン絵本が挙げられる。ポストモダン絵本の特徴である文学的慣習からの逸脱・多義性・間テクスト性・遊戯性などが読者に自ずと解釈を促す（Lazar, 2015；谷本, 2002）。結果、作者／作品の意図と読者の読みとが一致するとは限らなくなる。むしろ、読者も書き手として読みに参画するわけで、読むことと書くことの境界があいまいになる。前項で触れたことと併せると、ポストモダン絵本は、その絵や言葉の特徴ゆえに、字義理解を超えた解釈を読者に迫るということになる。

4.3. 研究課題

前項で述べた通り、ポストモダン絵本は、その絵や言葉の特徴ゆえに、字義理解を超えた解釈を読者に迫る。しかし、これは一般論であり、この一般論が日本の英語教育に実際にどれほど当てはまるかについては検証が必要である。また、解釈が読む楽しさに寄与するのかについても、日本人英語学習者を対象に改めて検証する必要がある。というのも、前述の Barthes（1975）は L1（第一言語）を想定して解釈と読みの楽しさの関係に触れたものであるし、解釈と読む楽しさの関連を探った小野・平川・柿元（2016）における解釈は教師によるものであり、学習者自身のものではないからである。そこで本論では次のような研究課題（Research Question）を設定する。

RQ1：ポストモダン絵本 *The Red Tree* は日本人英語学習者にどのような解釈をどのように促すのか。

RQ2：ポストモダン絵本 *The Red Tree* によって促された解釈を、日本人英語学習者はどのように感じるのか。

前述のごとく、本論は「ポストモダン絵本を中等英語教育の副教材に使用することを提案する」ものであるが、実際の使用法としては、(1) 教室外で学習者が個人的に読むというもの、(2) 教室内で複数の学習者が話し合い等を交えながら読むというのが想定される。これら二つの使用法の両方を視野に入れつつ、本論では後述するように *The Red Tree* を (i) 一人で読んでもらった後、(ii) グループで同書に関する意見を交換してもらった。(i) の時点で既に解釈は見られたが、本論では紙幅の都合上 (ii) での解釈 (上記 RQ1 に対応) 及び解釈への反応 (上記 RQ2 に対応) について主に触れる²⁾。

5. 調査

前節の研究課題に取り組むため調査を行った。本節では調査材料、調査協力者、調査手順について説明する。

5.1. 調査材料

調査材料は、オーストラリア出身の作家・画家 Shaun Tan が書いた *The Red Tree* である³⁾。ポストモダン絵本と言われる作品の中から本論が *The Red Tree* を調査材料に選んだ主な理由は次の2点である。1点目の理由は、単純に本論の筆者が *The Red Tree* を内容的に面白いと感じたからである。実際、筆者が行ったパイロットスタディでも、参加者は明らかに *The Red Tree* の世界に引き込まれていた。また、Lazar (2015) が日本の大学生を対象に行ったパイロットスタディでも *The Red Tree* の内容に対する好意的な意見が報告されている。

2点目の理由は、内容面に加え、言語的にも *The Red Tree* が読み易く、日本の中等英語教育でも使い易いと判断したからである。総語数が122語と比較的少ないため、授業で扱うことも十分可能であろう。また、英語の難易度も中等英語教育に適切であると言える。Flesch-Kincaid Reading Ease によるリーダビリティの値は、“Easy to read”⁴⁾に分類される86.6であった(なお、この作品は一度もピリオドが打たれていないため、適宜ピリオドを付け足した)。また、全122単語の語彙頻度レベルを JACET 8000 の分析プログラム v8an で調べたところ、以下のような結果となった。

表2 *The Red Tree* に現れる英単語の JACET 8000におけるレベルと単語数の割合

JACET 8000 における語彙レベル	<i>The Red Tree</i> に現れる単語数	割合
Level 1	111	91.0
Level 2	6	4.9
Level 3	2	1.7
Level 4	2	1.7
Level 5	1	0.8
Level 6	0	0.0
Level 7	0	0.0
Level 8	0	0.0
計	122	100.0

レベル1に相当する単語は「中学校の基本」(相澤・石川・村田, 2005) 程度のレベルであり、全体の約91%を占めていた。また、総語数の約95.9%がレベル2の「高校の初級」(相澤・石川・

村田, 2005) 以内の単語によって構成されている。Laufer (1989) によると, ある英文テキストで使用されている語彙の 95% が既知である場合, 学習者は同テキストを辞書なしでも理解できる。リーダビリティと語彙頻度レベルの両面から, *The Red Tree* は日本の中高生にも決して難しくはない英語で書かれていることがわかる。

5.2. 調査協力者

調査協力者は, 某国立大学の教員養成系の学部 2 年生 2 名と 1 年生 6 名の計 8 名である。TOEIC の平均点は, 682.5 点であり, 最高点と最低点はそれぞれ 820 点と 610 点であった。この結果から, 調査材料である絵本を読むのに十分な英語力を備えていたと考えられる。なお, 本来ならば中高生に調査協力を依頼すべきであったが, 協力者を確保することが難しく大学での実施となった。日本の中高生は英語文学に触れた経験はあまりないと考えられるため, 文学関連の単位もまだそれほど取得していない学部 1, 2 年生に協力を仰いだ (調査は 5 月に行われたため, 6 名の学部 1 年生は高校卒業後間もないということになる)。

5.3. 調査手順

調査は次の 2 段階で実施された。

(1) まず, 調査は本論筆者の一人である清水 (以下, 調査者) と協力者の 1 対 1 で行われた。協力者は *The Red Tree* の「絵本の中で疑問に思ったことや感想など」を述べる機会が後にあると伝えられてから, 同作品を 10 分間黙読した。その際, メモの筆記や, 辞書の使用は認められた。10 分間の黙読後, 協力者は単独で調査者から半構造化インタビュー (以下, 単独インタビュー) を受け, *The Red Tree* に関する感想等を自由に述べた。その後, *The Red Tree* に関する 6 段階尺度形式アンケートに回答した。他の協力者 7 名も上記と同様の手順で調査に協力した。

(2) 調査者と 1 対 1 で単独インタビューを受けた協力者 8 名は, 次にグループディスカッション (以下, ディスカッション) を行い, それぞれの感想を話し合った。ディスカッションの時間は特に設けなかったが, 結果的に約 38 分間のディスカッションとなった。その後, それぞれの協力者はディスカッションについての自由記述式アンケートに約 5 分間答えた。その後, (1) と同じ 6 段階尺度形式アンケートに回答した。

協力者の同意を得て, (1) の単独インタビュー, (2) のディスカッションともその様子を録音, 録画した。なお, 「4.3. 研究課題」で触れた通り, 本論では (2) で得られたデータのみを扱う (ただし, 6 段階尺度形式アンケートに対する回答は紙幅の都合上扱わない)。

6. 調査結果とその分析

調査で得られた結果を適宜提示するとともに, それを分析する。6.1. はディスカッションで得られたデータを対象としており, 上記 RQ1 に対応するものである。6.2. は自由記述式アンケートを対象としており, 上記 RQ2 に対応するものである。

6.1. ディスカッションの結果とその分析 (RQ1 に対応)

ディスカッションで得られた録音・録画データから文字起こしを行い, テキストデータを作成した。同データ自体が調査結果であるが紙幅の都合上その掲載は控える。ここではデータの分析を行いながら, 適宜結果を示すことにする。

上記テキストデータを分析し、協力者がディスカッションで話題にしていた内容をある程度のまとまりに分けた結果、12点の内容が抽出された。それら12点に番号①～⑫を割り振ってまとめたものが表3である。表の一番左の列にあるように、協力者の話し合いは解釈に関わるもの10点(①～⑩)と、字義理解に関わるもの2点(⑪⑫)とに大別できる。*The Red Tree*は協力者の解釈を大いに促したと言える。真ん中の列は、協力者が言葉と絵のどちらに主に着目したかを示したものである。解釈は、①言葉に着目したものの、②～⑤絵に着目したものの、⑥～⑩言葉と絵の両方に着目したものに分けられるが、字義理解の場合は必然的に言葉に着目したことになる(⑪⑫)。一番右の列には、ディスカッションで話題となった絵本中の実際の言葉や絵を、それらが掲載されているページ数とともに示している。なお、*The Red Tree*にはページ数が記されていないため、最初の絵(ラッパのようなものを使って何かを喋っている少女の絵)が掲載されているページを1ページ目とした。また、特定のページに限定されることなく、作品全体に関わる話題については掲載ページを「全ページ」とした。

表3 ディスカッション内容の分類

解釈/字義	着目点	話題となった言葉や絵やテーマ (掲載ページ)
解釈に関わる話し合い	言葉に着目	① 言葉：“a deaf machine” (p. 12)
	絵に着目	② 絵：貝殻の絵 (pp. 16-17)
		③ 絵：ページが真っ赤に描かれていること (pp. 34-35)
		④ 絵：少女を描いた絵 (p. 1)
		⑤ 絵：赤い葉の絵 (全ページ)
	言葉と絵に着目	⑥ 言葉と絵：“without sense or reason”とページの絵との関わり (pp. 14-15)
		⑦ 言葉と絵：“REGRET”と鍵の絵との関わり (p. 21)
		⑧ テーマ：あることが繰り返されている (全ページ)
		⑨ テーマ： <i>The Red Tree</i> の幸せ/不幸せの割合 (全ページ)
		⑩ テーマ： <i>The Red Tree</i> を読む適齢期 (全ページ)
字義理解に関わる話し合い	言葉に着目	⑪ 言葉：“right” (p. 31)
		⑫ 言葉：“by” (p. 20)

「5.3. 調査手順」(1)の単独インタビューでは出なかったものの、(2)のディスカッションでは出た解釈もあった(②③④⑧)。解釈は一人よりも複数人で行う方が活性化されることを示唆するものである。本論のRQ1「ポストモダン絵本*The Red Tree*は日本人英語学習者にどのような解釈をどのように促すのか」に答えるべく、解釈に関わる話し合い①～⑩のうち、協力者が特に活発に議論を交わしていた①④⑦⑧(太字部分)を取り上げて分析する。8名の協力者はA～Hと表記する。

① 言葉に着目した解釈：“a deaf machine”について (p.12)

まずは、言葉に着目したディスカッションから分析する。“a deaf machine” (p.12)をめぐる話し合いに参加したのは主にA, D, Hの3名であった。

D：“the world is a deaf machine”ってところで、“deaf”って調べたら「耳の聞こえない」って意

味があったんですけど、この文の意味がわからなかったです。

H：辛いときって周りの声が聞こえないくらい、自分のことで精一杯になっているから、そう表現したのかなと思いました。

A：“the world is a deaf machine”って書いてあって、“the world”が“deaf machine”だから、自分が聞こえないというよりは、自分の声に誰も耳を傾けてくれないって感じかなって。周りは日常なことばかりやってるから機械的に見えて“deaf machine”なのかと。

D：7ページに“nobody understands”があるから関連してるかも。

Dはディスカッション前の単独インタビューの時から“deaf”という言葉の意味を疑問点として挙げていた。ディスカッションでは“deaf”を辞書で調べても“the world is a deaf machine”という文の意味がわからないと発言している。書かれたもの（言葉）に基づいて自分なりの解釈をまさに始めようとしている段階ではあるまいか。Dのこの発言をきっかけに、“the world is a deaf machine”の“the world”が何を指しているのかに論点が移っていく。Hは、“the world”を少女の中にある世界、又は少女自身であるとする中で、「耳の聞こえないのは少女自身である」と解釈している。一方、Aは“the world”が一般的な世界、又は世界の人々を指すと解釈している。この解釈に賛同するかのように、Dは他ページにある“nobody understands”という言葉に言及している。Aの解釈に対し、新たな言語的根拠を提示しているのである。

“world”に定冠詞が付く場合、通常は「自分を含めた世界全体」のことを意味する⁵⁾。「自分」を強調すればHのような解釈が、「自分」という要素を小さくすればAのような解釈が成り立ち得よう。いずれにせよ、“the world is a deaf machine”という文の字義理解に基づきつつ、それを超えようとする解釈がここでは展開されている。

④絵に着目した解釈：少女を描いた絵について (p.1)

次に、絵に着目したディスカッションを分析する。絵本の1ページ目には、ラッパのようなものを使って何かを喋っている少女の言葉が、そのラッパからこぼれ落ちている様子が描かれている。この絵に関し、主にB、C、Hの3名が話し合いに参加した。

C：1ページの絵、どう思いましたか。こういう感じかなって思い付く方いますか。

H：パッと考えて思ったことは、言いたいことが言えないから、それが心の中に溜まり切って。

何かを用いることによって、誰かの力を借りることによって自分が喋れるという感じかなって一瞬思いました。

B：でもあんまり喋れてないんですね。しかも誰と喋っているわけでもないし。一人で喋っているにもかかわらず、(言葉が)下に落ちるくらい喋っているって感じが出ている。

この絵については、ディスカッション前の単独インタビュー時にはどの協力者からも指摘はなかった。この絵が着目されるようになったのは、直前にCが「色んな所で、とても考えて書かれているなって。細かいところまで(作者が)見てるな」と発言したからであると思われる。この発言がきっかけとなり、他の協力者も絵本の中に新たな意味を見出そうとし、この絵に着目したと考えられる。

絵本の1ページ目にはラッパのようなものを使って何かを喋っている少女が大きく描かれてい

るのみで、言葉は含まれていない。絵を見てもほとんど何も考えない場合もあろうが、ここは違っており、まずはHが絵から読み取れる世界を自分の言葉で描こうとしている。まさに writerly なポストモダン絵本の真骨頂といったところか。そのようにHが描こうとしている世界（解釈）を今度はBが引き取って、自分なりの解釈に持っていこうとしている様子がうかがえる。ある解釈がまた別の解釈を誘発したと考えられる。

⑦言葉と絵の両方に着目した解釈：“REGRET”と鍵の絵との関わりについて（p.21）

次に分析するのは、言葉と絵の両方に着目したディスカッション内容である。絵本21ページに描かれている鍵の絵には、よく見ると“REGRET”の文字が刻まれている。そのことに関し、主にA, D, F, Gの4名が話し合いに参加した。

G：21ページのところで疑問に思ったのがあって。絵の中に鍵が付いてるんですけど、鍵のところに“REGRET”ってあるんですけど、なんで“REGRET”の鍵なんかなくて思ったんですけど。

F：素晴らしいものを逃してしまった後悔？

G：そんだけ？ wonderful が通り過ぎた時って後悔とかってある？

F：ある…！え、ないかな？

A：僕は普通に過去のこと引きずり過ぎて、せっかく目の前にある素晴らしい物事に気づかずに通り過ぎちゃうのかなって思いました。

F：ああそっか。過去にとらわれすぎて、後悔の鍵みたいなのから出れんみたいな。目の前にあっても出ていけないって感じ。

D：目の前が見れてないみたいな。そういう感じか…。

“REGRET”と鍵の絵の関係は、ディスカッション前の単独インタビューの時から複数の協力者が疑問点として挙げていた。ディスカッションでは、協力者は“REGRET”を共通して「後悔」の意に取っている。ただ、この字義理解から出発しつつも、「何を」後悔しているのかについての解釈へと発展している（例：Fの「素晴らしいものを逃してしまった」ことを後悔しているという解釈）。最終的には、引用後半のA, F, Dのやり取りにあるように、鍵の絵を手掛かりに、後悔することによる悪影響にまで解釈が及んでいる（例：Fの「後悔の鍵みたいなから出られ（ず）に、目の前にあっても出ていけない」という悪影響についての解釈）。まとめると、絵や共通の字義理解を根拠に、協力者同士が知恵を合わせて解釈を膨らませている様がこの⑦ではうかがえる。

⑧言葉と絵の両方に着目した解釈：「あることが繰り返されている」というテーマについて（全ページ）

次の分析も、言葉と絵の両方に着目したディスカッションに関するものであるが、話題は作品全体に見られる「あることが繰り返されている」というひとつのテーマであった。主にA, C, D, F, Gの5名が話し合いに参加した。

C：最後に木が咲く部屋は、たぶん自分の部屋じゃないですか。それが自分の心だと仮定したら、それまでは壮大なところにいたのに、結局は自分の心の中で完結するんだなって。そ

れまでは周りの世界とかすごかったじゃないですか。すごいところにいる。だったけど、結局自己完結するところは心の中なのかなって、1番自分の中で狭いところなのかなってことを感じました。

D: 気づいたのが、各ページに葉っぱが落ちてるって話が（これまでのディスカッションで）あったんですけど。その木の葉っぱの形と、5ページと7ページで大量に降ってくる葉っぱの形が一緒で。あと部屋も一緒じゃないですか。その、ループしてるんじゃないかなって考えたりしました。

G: 時計の針。秒針っていうか、針が、この葉っぱの数だけ悪いことあったら良いことあるみたいなの。

F: 良いことが巡ってくるってこと？

G: うん。

A: 確かにそう考えると、良いことめぐってくるの少なすぎるよな。

「あることが繰り返されている」という発言が実際にあったわけではない。しかし、何らかが繰り返されているという解釈に関しC, D, Gは共通している。異なっているのは、繰り返されているものが何であるかの解釈である。Cは少女の居場所が「壮大なところ」から「自分の部屋」（「自分の心の中」）に戻っていることに触れている。絵本がそもそも少女の部屋から始まっていることを考慮すると、少女の部屋→壮大な場所→少女の部屋→壮大な場所→…という繰り返しがある、とCは解釈しているのではあるまいか。Dは、「葉っぱ」のイメージが絵本全体に繰り返し出てくることに言及している。Dの「葉っぱ」という言葉に触発されたのか、Gは時計の針（繰り返し回転するもの）から、「悪いこと」と「良いこと」の繰り返し（AとFの表現では「めぐり」）を連想している。「あることが繰り返されている」という共通の解釈に基づきつつ、「あること」が何かについてはC, D, Gのそれぞれが異なった解釈をしている点が興味深い。

「あることが繰り返されている」という旨の指摘は、ディスカッション前の単独インタビュー時にはどの協力者からも出なかった。この指摘は、ディスカッションでの話し合いの積み重ねから生まれたものと思われる（この指摘が出たのはディスカッション開始から約30分経過後）。先にも触れたが、解釈は一人よりも複数人で行う方が活性化されることが示唆されている。

6.2. 自由記述式アンケートの結果とその分析（RQ2に対応）

6.2.1. 自由記述式アンケートの結果

上のディスカッション後に実施された自由記述式アンケートには協力者8名全員が参加した。上記RQ2「ポストモダン絵本*The Red Tree*によって促された解釈を、学習者はどのように感じるのか」に対応するこのアンケートは、学習者自身の解釈が読みの楽しさに結びつくのかを探るものである。アンケートには次の指示文を添えたが、協力者を誘導することを避けるために「解釈」や「楽しさ」といった文言は敢えて使用していない。

*The Red Tree*に関する疑問点や感想、他の学生と考えを共有する活動についての感想など自由にお答えください。

この指示文中の「*The Red Tree*に関する疑問点や感想」は、*The Red Tree*を解釈することに対

する反応を探るものである。同様に、「他の学生と考えを共有する活動についての感想」は、ディスカッションで互いの解釈を話し合うことに対する反応を探るものである。記述時間は設けなかったが、約5分で全員がアンケートを書き終えた。自由記述式アンケートの結果として、表4に8名の協力者A~Hのそれぞれが記述した全文を載せている。なお、表中の番号・記号と実線・波線は筆者が付したものである。

表4 自由記述式アンケートの結果

協力者	記述内容(全文)
A	(1) <u>話し合い活動をしたことによって、最初に自分が読んだときには気付かなかった視点や、自分ひとりでは考えつかなかったような様々な解釈に出会うことができ、面白かった。</u> 一方、自分以外のほとんどの参加者が年下で、自分がどれくらい話したらよいか、またどのような口調で話したらよいか戸惑い、緊張していた。 (ア) <u>個人的に、このように易しい英語で書かれていて親しみやすいと同時に、多様な解釈ができる本を教材として用いるのは良いアイデアだと思った。</u>
B	(2) <u>感想や意見を共有することで自分の持つ以外の視点を得ることができてとても有意義でした。授業一つ分受ける以上の濃さがあったのでまた何かあれば呼んでいただきたいと思います。</u>
C	自分が疑問に思っていたことや、自分だけの角度から読み進めていたことも、実際深く考え直したり、(3) <u>他の人の意見を聞いてみると、新たな発見もあるものなんだなあとと思った。</u> この活動を通して、普段何気なく目にすることやあまり深く考えないことにも、奥深さがあって、その捉え方は人それぞれ異なるから意見共有をしていくべきなのだとということに気づくことができました。
D	自分が読み取った意味以外にも、(4) <u>人が読み取った情報などを共有することで、新たな気づきがあって、面白いと思いました。</u> 特に(イ) <u>この本の場合には、一人では(複数人でも)読み取れないものばかりで、いろんな人に読んでもらって意見交換をしたいと思います</u> と思われるものがあった。今回のように複数人でディスカッションをしているうちに、作者も意図しなかったようなことも出てきそうで、話し合う価値は高いと思った。
E	自分が持たなかった感想や意見、疑問があげられていて言われてみるとそうだなと思うことが多くありました。(5) <u>人が集まって話をするとう有意義なものになると改めて思いました。</u>
F	自分一人では考えつかなかった見方や考え方にとっても関心を持ったし、多くの意見が出てくることでより深く読むことができると思った。なんとなく(6) <u>ほんやりしか理解できていなかった所を他の人の意見を聞くことではっきりとし理解することができて楽しかった。</u> (ウ) <u>絵本はやっぱり簡単な言葉の中にいろんなメッセージが込められたステキな作品だ</u> ということ改めて気づくことができた。
G	(7) <u>自分の感想を他者と共有することで、異なる視点から見たものを知ることができるので、面白いと思いました。</u> 授業の中でこの活動を取り入れるのは、生徒に考えさせることができるし、異なる視点から物語を見ることができるので、生徒のためになると思いました。
H	(8) <u>人の意見を知ることで考え方も変わるし、視野が広がったという感じがします。第一印象でみなさんいろいろ考えていらっしやっただけで、物事をただこなすのではなく、意味を考えながら行動していくべきだと思いました。また、話をうまく回したり、続けたりすることの難しさだったりを感じました。授業をしていくうえで必要な能力なので、日常から気を使っていくべきだと思いました。</u>

この自由記述式アンケートの結果に対し、下のような分析を行った。なお、アンケートの上記指示文を2分割し、「The Red Treeに関する疑問点や感想」に関するアンケートの結果分析(6.2.2.)と、「他の学生と考えを共有する活動についての感想」に関するアンケートの結果分析(6.2.3.)を別々に行った。

6.2.2. アンケートの結果分析1: The Red Treeを自らが解釈することに対する学習者の反応

自由記述式アンケートはディカッション後に一回のみ実施した。よって、上の指示文後半の「他

の学生と考えを共有する活動」についての記述が占める割合が大きくなった。しかし、全記述に占める割合は比較的小さいものの、指示文前半の「*The Red Tree*に関する疑問点や感想」に関しても8名中3名に記述が見られた。まずは、これらの記述を分析することで、*The Red Tree*を自らが解釈することに対する学習者の反応を分析する。

表4中のA、D、Fの波線部（ア）～（ウ）に*The Red Tree*もしくは絵本を解釈することに対する反応が見られる。波線部（ウ）にあるように、Fは解釈が絵本の魅力につながることを再認識している。波線部（ア）にあるように、Aは多様な解釈に開かれた本に教材としての価値を認めている。Dは「この本の場合は、一人では（複数人でも）読み取れないものばかり」（波線部（イ））と、解釈の難しさに触れているが、Dの記述全文から、解釈にはむしろ肯定的な感想を抱えていることがわかる。

本論RQ2は解釈と読む楽しさとの関連を探るものであった。波線部（ア）～（ウ）から、協力者は、*The Red Tree*を自らが解釈することに対し、「楽しさ」を感じ取ったとは言わないまでも、少なくとも興味を示したとは言えよう。

6.2.3. アンケートの結果分析2：互いの解釈を話し合うことに対する学習者の反応

6.2.2で触れた通り、「他の学生と考えを共有する活動」については多くの記述が見られた（表3の実線部（1）～（8））。例えばAは、実線部（1）にあるように、「話し合い」と「様々な解釈」と「面白[さ]」とを互いに関連付けた記述を残している。「解釈」という表現を使っているのはこのAのみで、他は「感想」や「意見」等の表現を使っているが、これらは全て本論での「解釈」の定義に当てはまると考える。「互いの解釈を話し合うこと」を各協力者がどのように表現しているのか、また互いの解釈を話し合うことをどのように感じているのかを、表4の実線部（1）～（8）を元に改めてまとめたものが次表である。

表5 互いの解釈を話し合うことに対する反応

協力者	「互いの解釈を話し合うこと」に相当する各協力者の表現	互いの解釈を話し合うことに対する各協力者の反応
A	「様々な解釈に出会うこと」	「面白かった」
B	「感想や意見を共有すること」	「有意義」
C	「他人の意見を聞いてみる」こと	「新たな発見もある」
D	「人が読み取った情報を共有すること」	「面白い」
E	「人が集まって話をする」こと	「有意義」
F	「他の人の意見を聞くこと」	「楽しかった」
G	「感想を他者と共有すること」	「面白い」
H	「人の意見を知ること」	「視野が広がった」

表5に明らかなように、反応を示す表現は違えど、互いの解釈を話し合うことに対し8名の協力者全員が肯定的な反応を示している。それら肯定的な反応は大きく、(1)面白くて楽しい、(2)有意義である、(3)新たに視野が広がる、というものに分けられよう。ただ、この肯定的な反応には、解釈という要因と話し合いという要因の2要因があり、ことによると後者の話し合いという要因が主なものであった可能性はある。仮にそうであったにせよ、解釈は「読者がそれなりの

説得性をもって自由に展開する読み」(本論第2節の解釈の定義から)であるため、本質的に話し合い等によって活性化されると考えられる。

7. まとめと今後の課題

高等学校学習指導要領によると、英語で書かれた物語を読む際には、その字義を理解することに加え、読む楽しさを体験することも学習者にとっては重要である。字義理解と読む楽しさの両方が担保されているかを調べるために、本論では採択率上位10位までの高等学校英語教科書「コミュニケーションⅠ」に掲載されている物語に対する発問の分析を行った。結果、教科書における発問は字義理解に関するものが主で、学習者の解釈を促すような発問は不十分であることがわかった。読む楽しさは解釈によって助長されると考えられるため、教科書では字義理解が偏重されている反面、読む楽しさは軽視されているのではあるまいか。

教科書を補うために、本論ではポストモダン絵本を中等英語教育の副教材に使用することを提案した。ポストモダン絵本は自ずと読者に解釈を促すとされているからである。しかし、これは一般論であり、この一般論が日本人英語学習者にどれほど当てはまるかについては検証が必要であると考えた。また、解釈が読む楽しさに寄与するのかについても、日本人英語学習者を対象に改めて検証する必要があると考えた。そこで本論では次のような研究課題(RQ)を設定した。

RQ1: ポストモダン絵本 *The Red Tree* は日本人英語学習者にどのような解釈をどのように促すのか。

RQ2: ポストモダン絵本 *The Red Tree* によって促された解釈を、日本人英語学習者はどのように感じるのか。

これら二つのRQに応えるために調査を実施し、8名の調査協力者にディスカッションと自由記述式アンケートに取り組んでもらった。本論第6節での分析を以下のようにまとめ、RQ1とRQ2に対する答えとしたい。

RQ1の答え: 日本人英語学習者は、ポストモダン絵本 *The Red Tree* の言葉に主に着目したり、絵に主に着目したり、あるいは言葉と絵の両方に着目したりしながら、絵本の字義理解を超えるような解釈を各自もしくは共同で展開する。

RQ2の答え: 日本人英語学習者は、ポストモダン絵本 *The Red Tree* の解釈を自らが行うことに興味を示すとともに、解釈を他の協力者と話し合うことに楽しみ・意義・視野の拡がりを見出す。

注目すべきは、これら二つの答えが *The Red Tree* の読みを本論の調査協力者にほとんど完全に任せた状態で得られたということである。つまり、教師が特に介入せずとも、実際の教育現場でも同様の結果(学習者自らが解釈をし、それを楽しいと感じること)が得られると予想される。前述のごとく、*The Red Tree* の英語は平易であり、高校生なら無理なく、中学生でも辞書を使えば十分に読めると考えられる。これらのことから、ポストモダン絵本 *The Red Tree* は、中高の英語学習者が自ら解釈し、読む楽しみを感じるのに適した副教材になり得ると結論づける。

最後に今後の課題2点に触れておく。1点目は、一般的な絵本との比較である。本論では、ポ

ストモダン絵本 *The Red Tree* が日本人英語学習者に解釈を促すことは明らかになった。より一般的な絵本も日本人英語学習者に解釈を促すのだろうか。促すとしたら、その解釈はポストモダン絵本の場合とどう異なるのであろう。2点目は、現役の中高生を対象に同様の調査をすることである。*The Red Tree* の英語は平易であるとはいえ、実際の中高の教育現場では学習者間で英語力がかなり違うことも予想され、字義理解の段階で想定を超えるようなばらつきが出る可能性もある。また本論の調査協力者は、高校卒業後1, 2ヶ月(8名中6名)か、1年と1, 2ヶ月(8名中2名)しか経っていない大学生ではあったが、やはり中高生よりは豊かな人生経験を積んできたはずである。本論での調査結果を、中高生を対象とした調査の結果と比較させることで、より大きな教育的示唆が得られよう。

注

- 1) 本論では文学理論の知見を前提とするような専門的な解釈は想定していない。読者の直感的な「解釈」も、それが書かれたものに基づいたものである限り本論では解釈とみなす。
- 2) 一人での読みにおける解釈については、2018年3月に刊行予定の『教育学研究紀要』(CD-ROM版)第63巻(中国四国教育学会)中の清水奈美による単著論文を参照されたい。
- 3) *The Red Tree* 及びその作者 Tan の紹介は Lazar (2015) を参照されたい。
- 4) スコアとリーダビリティの基準は次の通り：0-29 Very Confusing, 30-49 Difficult, 50-59 Fairly Difficult, 60-69 Standard, 70-79 Fairly Easy, 80-89 Easy, 90-100 Very Easy
- 5) 例えば、*Collins Cobuild English Language Dictionary* (1987) によると、“the world”の意味のひとつは“all the societies, institutions, and ways of life of people living on this planet”である。

参考文献

- アーノルド, H. (2002). 「色のないのは一ベニー, 色つきのは二ベンスー絵本の絵と文の関係」.
In ワトソン, V.・モラグ, S. (編), 『子どもはどのように絵本を読むのか』(笹田裕子(訳), pp. 317-342). 柏書房.
- 相澤一美・石川慎太郎・村田年(編)(2005). 『JACET8000 英単語』. 桐原書店.
- エーコ, U. (1993). 「著者とテキストの間」. In コリーニ, S. (編), 『エーコの読みと深読み』(柳谷啓子・具島靖(訳), pp. 101-103). 岩波書店. (原著は1992年出版)
- エーコ, U. (2002). 『開かれた作品』(篠原資明・和田忠彦(訳)). 青土社. (原著は1967年出版)
- 小野章・平川真・柿元麻理恵(2016). 「教師による文学解釈が学習者の読解に与える影響」. 『広島外国語教育研究』, 19, pp. 213-224.
- 香曾我部秀幸・鈴木穂波(2012). 『絵本をよむこと「絵本学」入門』. 翰林書房.
- 谷本誠剛(2002). 「現代絵本と子ども読者」. In ワトソン, V.・モラグ, S. (編), 『子どもはどのように絵本を読むのか』(笹田裕子(訳), pp. 7-27). 柏書房.
- 村田夏子(2001). 「13章 文学を味わう」. In 大村彰道(監修)・秋田喜代美(編)・久野雅樹(編). 『文章理解の心理学：認知, 発達, 教育の広がりの中で』(pp. 190-201). 北大路書房.
- 文部科学省(2010). 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』. 開隆堂.
- Barthes, R. (1975). *The Pleasure of the Text* (R. Miller, Trans.). Oxford: Blackwell. (Originally published in French in 1973)
- Carroll, L. (1998). *Through the Looking-Glass and What Alice Found There*. In H. Haughton (Ed.), *Alice's*

- Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass* (pp. 121–241). London: Penguin Classics. (Original work published 1871)
- Laufer, B. (1989). What percentage of text-lexis is essential for comprehension? In C. Lauren and M. Nordman (Eds.), *Special Language: From Humans Thinking to Thinking Machines* (pp. 316–323). Philadelphia: Multilingual Matters.
- Lazar, G. (2015). Playing with words and pictures: Using post-modernist picture books as a resource with teenage and adult language learners. In M. Teranishi, Y. Saito, & K. Wales (Eds.), *Literature and Language Learning in the EFL Classroom* (pp. 94–111). London: Palgrave Macmillan.
- Nikolajeva, M. (2010). Interpretative codes and implied readers of children's picturebooks. In T. Colomer, B. Kummerling-Meibauer, & C. Silva-Diaz (Eds.), *New Directions in Picturebook Research* (pp. 27–40). New York: Routledge.
- Tan, S. (2001). *The Red Tree*. Sydney: Lothian Children's Books.

ABSTRACT

Using a Post-modernist Picture Book in EFL: Focusing on Japanese EFL Learners’ Various Interpretations of Shaun Tan’s *The Red Tree*

Akira ONO

Graduate School of Education

Hiroshima University

Nami SHIMIZU

Graduate School of Education

Hiroshima University

According to *The Course of Study for Upper Secondary School: Foreign Languages* implemented in 2013, one of the contents to be dealt with in English Communication I is “understanding information, ideas, etc., and grasping the outline and main points by reading explanations, stories, etc.” In the case of stories, “The Teaching Guide” (*Kaisetsu*) attached to *The Course of Study* states, “it is important for learners not only to understand the literal meaning of a text but also to enjoy reading it.” Enjoyment of reading a text (“the pleasure of the text” in Barthes’ term) is said to be enhanced by interpreting it (Barthes, 1975). To examine to what extent learners are encouraged to interpret stories, we analyzed the questions (“Comprehension”, “Read It Through”, “Reproduction”, etc.) attached to the stories in 10 English Communication I textbooks. This is because we thought that the questions reflect the ways in which the stories are read in the classroom. The results revealed that, while literal understanding of the text was emphasized, most of the questions were irrelevant to interpretation. Our conclusion is, therefore, that reading the stories in the textbooks does not lead to learners’ enjoyment.

To make the above situation better, we propose to use, besides the government-authorized textbooks, post-modernist picture books in secondary schools in Japan. Post-modernist picture books are generally said to be open to interpretation. This generalization, however, needs to be examined with Japanese EFL learners as target readers. The other generalization that interpretation leads to readers’ enjoyment should also be examined with the same readers. To examine these matters, this paper set the following two research questions:

RQ1: In what ways do Japanese EFL learners interpret a post-modernist picture book, *The Red Tree*?

RQ2: How do Japanese EFL learners feel about interpreting *The Red Tree*?

The Red Tree was chosen for two reasons: (1) we assumed that it would attract Japanese EFL learners content-wise; (2) the English in the book is easy even for secondary school pupils in Japan. To answer the RQs, we conducted a survey in which 8 undergraduate students (6 in their first year and 2 in their second) participated. We asked them to (1) read *The Red Tree* silently, (2) take part in a discussion on the book, and (3) answer a questionnaire in which they were required to write freely about the book and the discussion.

Analyzing the results of the survey, we found the following answers to our questions:

A to RQ1: Japanese EFL learners, individually or collaboratively, interpret *The Red Tree* beyond its literal meaning, focusing on its words, its pictures, or both.

A to RQ2: Japanese EFL learners show interest in individually interpreting *The Red Tree* and also find discussing their interpretations enjoyable, significant, and helpful for expanding their perspectives.

It is noteworthy that the survey was conducted almost independently of the surveyor. Similar results might be obtained in the actual classroom: Learners might enjoy interpreting *The Red Tree* without any special assistance from their teacher.